

若者へのメッセージ

< 1 > はじめに

学生には、教室のみならず、街の中や、いきつけの食堂などでも、勉学に関する討議を楽しむとともに、さりげなく発破をかけた元気付けている。それは、もちろんケースバイケースであり、その人にあったものとなることもあれば、全員に共通するものもあり、さまざまな様相を呈したコミュニケーションでもある。

こうした場でのコミュニケーションをもっと多くの方に聞いていただきたいと思っていたところ、00年度より本学学園便りに年2回のペースで執筆することになった。これを学生全員に発破をかける良いチャンスととらえて、執筆にいそしみ、若者へのメッセージを公式にかつ定期的に発信し続けてきた。メッセージの内容については、粹外思考の実践、感性の研ぎ澄まし、など多岐にわたったものである。

以下に、私からの若者へのメッセージとして、ここに記すことにした。内容は、学校のことから始まって、感性や風土自然までも扱うことにした。

< 2 > 内容の分類

1. ものづくりについて

- 06年07月「良さの感動はまず自分から
一個人的で創造的なもの造りのために一」
 - 08年10月「ものづくりは自由と制約のバランスで！！」
- #### 2. 感性・情念
- 01年07月「たっぷり時 間をかけて情念の蓄積を！
～夏休みを有意義に過ごしましょう」

05年07月「スケッチをはじめませんか」

3. 自然・風土、文化

- 03年07月「この夏、身近なところからすばらしさを見つけ
楽しみましょう！！」
- 05年10月「我らの立山について」
- 06年10月「郷土の良さを見つけ育てましょう」
- 07年07月「食とコミュニケーション、大いに楽しみましょう」
- 09年11月「文化および文化財をもっと身近にするには」

4. 出会い

08年07月「勉強にも人との出会いが不可欠！！」

5. 将来の社会

- 03年10月「専門家を目指す皆さん、
プロのプロたる所以とは！！」
- 04年07月「皆さんなら技術の時代をこの先どう変えますか？」
- 10年07月「技術は人間にかますぎ！！」

6. 生活の仕方

- 02年07月「皆さん、この夏休みは全力でフィーバーを！！」
- 10年*月「皆さん、今だからこそもっとスポーツを！！」

7. 学校、授業にて

00年07月「夏休み、大きく飛躍するために！種々体験を」

02年06月「建築、教育の日頃をつれづれに」

(父母会 5/18 にてスピーチ)

04年10月「学校って何なの？」

07年05月「勉学にむかう姿勢について、
学生とのディスカッションより」

09年07月「「もの造りの社会性」とは、授業のひとつまより」

< 3 > メッセージ

学園便りに掲載したメッセージを時系列的に列挙する。

00. 7 *****

「夏休み、大きく飛躍するために！種々体験を一」

富山コンピュータ専門学校では7/7で前期授業が、富山美術工芸専門学校では7/22で第一期授業が終わり、夏休みに入ることになります。専門学校では修学期間が二年間と短く、その期間の中で各専門における基礎から実践までを修めねばなりません。ですから、夏休みは有意義にしかも活動的に過ごして欲しいものです。といいますのも、これまでの学習成果を自分自身の力で総合的にまとめてみることで、学期の終わりに位置するロングフリータイムという夏休みにはびったりだからです。そんな夏休みに、大いに創作し、自主的に自発的に自分のパッション(情熱)を形にしてみるならば、後期や第二期に向けて大きく飛躍することができることでしょう。もちろん、夏休みの制作課題がたんまりと出ていることですが、上述のようなスタンスであくまでも自主的に大いに励むならば、結果として自然と作品ができあがるものです。

学校側では、学生諸君に夏休みを有効にということで、インターンシップを企画しました集中講義・資格取得特訓講座などを開催することにしております。インターンシップは各専門分野の企業における就業体験を通して、社会に旅立つ予行練習や本番練習をすることになり、美工専の二年生(デザイン学科、建築学科(一部の学生))は今出番を心待ちにしております。

資格試験対策については、これまでに修得した知識を自由に円滑に頭脳から出し入れの練習と考えております。実社会でスピーディに仕事をするために「あれはえーと…」などといっておれません。即答という頭脳から情報を直ぐに検索できる訓練と思えば、ただ忘れないように、覚えていなくてはという強迫観念は無くなり、資格にも大いにチャレンジする気持ちが沸き上がり、資格へまた一歩近づくことになることでしょう。

最後に、私たちから先人として一言。私たちの若かりし頃もまた皆さんと同じように三度の飯よりもデッサンや作品制作、それにプログラミングが好きでしたし、今も初心は変わりません。初心を大きく膨らませるように日頃から感性を磨くこと。また、大いに旅行すべし。もの造りは、本物をみたり触ったりすることが大きな感動を呼び起こします。それが感性の糧とな

ります。研修旅行とは違って、自ら企画し、自ら歩いて。北海道一周でもいいし、ヨーロッパでもいいし。大きな飛躍のために。

01・7 (99.7と同じ文)*****

「たっぷり時間をかけて情念の蓄積を！」

～夏休みを有意義に過しましょう～

これから皆さんは夏休みに入ります。高温多湿な日本の夏を効果的に過ごす為の夏休みですが、小・中・高の時代には夏休みの盛り沢山の宿題に苦しみ悩まされた人も多かったことでしょう。では専門学校はというと、(二年生の方は承知でしょう)夏休みの課題をだされる教師もいらっしゃることでしょうが、大方は宿題といったものはあまりなく、人から言われる事なく皆さん自身で有意義に行動することが当然要求されております。私は、「夏休みにはまとまった時間を自由に使うことが出来る」のだから、旅行や自由な研究やボランティアでもなんでも積極的に行動すべしとよく言っております。今の時代には三度の飯よりも作品造りが好きとか暇だから作品を造ろうといった雰囲気はなく、そうした雰囲気も自ら造る時代になったといってもいいでしょう。ですから、「ものづくり」の気迫というか情熱というかそういったものを養うには自ら積極的に行動しなければなりません。

ちょっと先人達の例をみましょう。イサムノグチという著名な彫刻家がおられました。彼は年老いても創作が衰えることを知りませんでした。ある人が彼に次のように聞きました。「なぜ若々しいみずみずしい感覚でしかも創作意欲が衰えないのか」と。彼は答えました。「若い時代に考えていたことを今の年までずーと作品にしてきているだけです」と。そうです、皆さん。イサムノグチは若いときに多くの体験を積み重ね、自分のバックボーンを構築して下さいといっているように思えます。アインシュタインもしかし。時計と物差しが一緒に見えたという子どもの時の遊びを通して信念や哲学めいたものを培ってきた経験が後年になって相対性理論として花開いたのです。

皆さんには、世界的発見や世界的創作を目指して頑張りたいのは正直なところですが今そういったことを主張したいのではなく、皆さん自身の道を勢力的に歩むための羅針盤がこうしたたっぷり余りある時間と空間で造り上げられていることを知っていただきたいのです。もちろんこうした余裕が次への飛躍を生みます。ただし、余裕を有意義にするのも皆さんの心意気一つです。大きな視野で見通しを持って、歩みを小さくてもいいから着実に一歩ずつ。そうした時期が夏休みですので、健闘を。

02. 6*****

「“建築”、教育の日頃をつれづれに」

(父母会5/18にてスピーチ)

学生とのコミュニケーションにより学生と教師との間で教育という「ものづくりと人づくり」に励んでおります。少し教育理念的なお話を紹介します。

若者の進学の動機は様々であります。建築の場合には、絵が

好きならデザイン系へ、コンピュータが好きなら情報系へといったことはなく、建築って何となくいいなあと思って入ってくる人がほとんどです。資格は欲しいとかいっても、その先には建築に寄せる期待があります。ただ建築というものがあまりにも漠然としたものであるだけに、単純明快な動機づけがしにくいといったところではあります。

では「建築とは」と考えてみますと、建築なくしてそう我が家なくして生活が成り立ちません。建築は空気みたいなもので重要性を自覚しないものです。ですから、いざ建築とは聞かれたらあまり答えられないのが正直なところであり、そういうものなでもあります。これだからこそ逆に、建築に対して皆さんはいろいろな想いを自由に持つこともできます。「建築イコール我が家」であってもいいのです。当然入学してくる学生においても。学生が「木造住宅が好きでそうした関連の企業に就職したい」から、木造だけ勉強し他は勉強したくないといって、ターゲットを絞ってもきます。こういう場合、「いやそうではなく建築は生活空間を造るもの」、「建築をたまたま木材でつくっても中身である生活空間が大事」と説いており、彼らのエネルギーが萎まないよう大きく増産するように努めております。

実は、彼らの想いや問いかけは本質をついているのです。我ら教師側も彼らの熱い問いかけに応じることにより、彼らと我らとで建築を担っていくのです。父母の皆さんも経験があることでしょう。小さな子供が「お母さん、水はどうして水蒸気になるの」と聞いてきたりして、彼らなりの問いかけに大人はたじたじだったでしょう。そうです、今度は舞台を変えて、彼らはプロの卵として熱い問いかけをします。「そんなことわからないのか」では決してありません。こうした問いかけの連続が学び手と教え手との間の知的コミュニケーションを形成し、明日の建築といわず明日の人を育くみます。かくいう私もすらすらと講義をしておりますが、これは決して私自身がオリジナルで考えて構成したわけではなく、私とこれまでたくさんの学生とのコミュニケーションで造り上げたものを後進の学生に託すために私が演じ、またあらたなものを造り上げているのです。

父母の皆さん、彼らのそうした想いをご理解いただき陰ながら結構ですので応援いただければ幸いです。

02. 7*****

「皆さん、この夏休みは全力でフィーバーを！！」

皆さん、もうすぐ夏休みがやってきます。長い夏休みは通常の授業とは違って自分で自由にできる時間はタップリですので、こうした時間を有意義に活用することを考えてください。長期旅行するのもいいし、長編の読書もいいし、課題制作とは別に何か作品制作もいいし。スポーツでもいいし。ただし、思い切り楽しみフィーバーしながら。

そういえば、2002年ワールドカップが終わり、サッカーフィーバーがようやくここに一段落しました。皆さん大いに沸き立ったのではないのでしょうか。サッカー好きの人はもちろんのことニワカサポーターも大いに沸き立っていました。ニワカはけしからんとはいってもフィーバーを楽しんでいたことは事実です。とにかくあのフィーバーぶりは凄かったといえます。

ここでふと考えてみましょう。なぜあのように燃え上がったのでしょうか。サッカーでなくても、駅伝でもマラソンでもなぜ淡々と走っている様がドラマになるのでしょうか。それは、全力疾走しているからでしょう。走る側も見る側もそれがあるからでしょう。

我ら日常生活において必要に応じて全力疾走をしているでしょうか、あるいは燃えに燃えているでしょうか。すぐに「だやい」とか「疲れた」といったことが多いのでは。例えば野球で野手の近くにボールが飛んできて、走って取れそうにない微妙なタイミングだとしたら、走って間に合わないなら走らない方がいいと野手が合理的に考えてプレーをしたら、観客には緩慢プレーとしか写らないことでしょう。観客は野手のそうした判断を見にきているわけではないので、たとえ取れなくても走るというチャレンジをやはり期待していることでしょう。

この世の中、妙な合理主義がはびこっていて全力疾走するチャンスと場がなくなってきました。それだけに、そうしたドラマには観賞者側からは大喝采があるのでしょうか。もちろん、フィーバーは理屈ぬきでフィーバーであります。皆さんも、そうしたフィーバーを自分自身にもむけて、この夏休み、勉強でも作品制作でも遊びでも大いにフィーバーして正常な感覚を研ぎ澄ませて欲しいものです。それが皆さんのチャレンジ精神の醸成や活力の醸成につながるからです。頑張ってください。

03. 7*****

「この夏、身近なところからすばらしさを見つけ楽しみましょう！！」

いよいよ夏休みです。意味あるすばらしい体験を積み重ねて楽しんでいただければと思います。いろいろなことにチャレンジし行動し、皆さんなりにすばらしさを発見してください。すばらしいことは身近に沢山あります。私は山について面白く楽しんでます。紹介します。

『事の起こりは数年前の夏。富山の活発な建築系団体の方が「全国の活動的建築家多数を富山に招いて勉強会を開催し、アトラクションで立山高原道路の排ガスによるブナ林を見学したいが」としてコメントを求められた。すかさず持論をぶった。「排ガス公害を専門にしている研究者ならいざ知らず、せっかく富山にこられるなら立山のすばらしさを満喫すべきではないのか。これ無くしての見学ですか？」。立山の脇役かもしれないが大辻山のハイキングをすすめた。もちろんその方も当然大賛成でアトラクションが実施され、多くの方から「富山はすばらしい」と感慨深げに語っていただいた。

立山のすばらしさを満喫されたい方におすすめしたいのは立山の前座に位置する大辻山(標高 1360m)へのハイキングである。この山からは、立山三山(雄山、大汝山、富士の折立)、剣、大日岳、桑崎山、薬師岳、という立山連邦がパノラマとして一望でき、また弥陀ヶ原の高原台地に加えて称名滝も見え、本当に山が地球からはみ出した大きな大きな塊に映る。

一般に山については、頂上に立ってみると、展望が開け遠くまで実に雄大にみわたせるが、自分の立っている山そのものは見ることはできない。当然、見たい山はその山から離れてみる

ことになるが、これは離れすぎても近すぎても今ひとつである。我らの立山連邦。富山平野から連邦をみると離れすぎであり、確かにシルエットとして屏風としてみる山の広がりや頂きは絶景であるが、難をいうと奥行きがわからないし、遠くにあることにより全体のボリュームが実感としてわからない。これに対して、剣岳のまん前にある中山のように高い山の直近の場合には、迫力がありすぎ圧倒され迫力を観賞するといったゆとりはない。

山については、何も常に最高点を求めるのではなく、最高点の雄大さを目の当たりにして観賞する観賞もまた絶景なり。がむしゃらな時期を越えてくると、中規模の山に登る楽しみがしみじみと実感できた。そして病みつきになり中景の良さを知った。自然破壊がどうのこうのというなら、大辻山からの展望を楽しんでから大いに語り合ひましよう。』

皆さん、専門家を目指されて日夜頑張っておられますが、もちろん最高点を目指すけれども、最高点のすばらしさもぜひ知っていただきたい。これが専門家に奥味を持たせ、なによりも人間を大きくすることでしょう。

03. 10 *****

「専門家を目指す皆さん、プロのプロたる由縁とは！！」

皆さん、デザインや建築やコンピュータの職業につき専門家として社会に参画するために、日夜勉強に励んでおられることと思います。

ここでちょっと「専門家(プロ)とは一体何なの」と問いかけてみたくまりました。そんなこといわれなくても「プロはプロ」というようにプロという言葉をもっと簡単に我ら使っています。「何でいまさら」という逆の問いかけもあるかとは思いますが。例えば最近の医療事故ひとつとっても、一般市民に対しての専門家のあり方が今だからこそ問われております。

プロとか専門家という呼び名は、特別な専門知識や技能をもっている人の総称であり、皆さんも巣立てばプロですし、プロ野球の選手もプロですし、とにかくにもプロはプロということになります。ところが、プロにはもうひとつ大事な条件が必要となります。それは、市民から尊敬されることです。

もともとプロという言葉はルネサンス期ヨーロッパで生まれた言葉であり、正式にはプロフェッションといい、日本語では専門家とか職能とかいいます。当時の世界では社会がそんなに高度化していなかったことにもよりますが、当時のプロは四種類あり、四大職能といわれておりました。その職業とは、第一に聖職者、第二に医者、第三に弁護士、第四に芸術家です。いわれてみれば確かに、これらの職業が、人間の自然的にも社会的にも生命を救うことや、人間の精神的救済や育成に大きくかわりあう職業だけに、市民から尊敬の念がなければ成り立ちません。

では、現代はどうでしょうか。中世以降、社会が進化し高度化し肥大化し、分業と専門分化、専門進化が加速的に進み、沢山の専門があって初めて成り立つこの世の中と違って良いでしょう。第四番目の職能がエンジニアとアートに分かれ、そのエンジニアから沢山の分野が分かれていきました。皆さんは、

その意味ではダビンチやミケランジェロの21世紀の弟子ともいえます。ただし、専門家は市民あつての専門家です。その点がしばしば忘れられがちです。

皆さん、胸をはって「さすが専門家」といわれるように頑張りましょう。

04.7 *****

「皆さんなら技術の時代をこの先どう変えますか？」

皆さん、これから夏休みですね。クーラーの効いている部屋で勉強したり語り合ったり、アルバイトに精を出したり、携帯電話にITの利用など、若者らしい生活をエンジョイされることでしょう。でも皆さん、過去の若者と比べると汗を垂らしながら何かに打ち込むといったことも少なくなってきました(そうでない人も沢山いますが)。これが現代の生活の様相といても過言ではありません。ですから、次の時代の担い手である皆さんが次の時代が「どうあればいいのか」、「どうしようか」など、この時期にじっくりと考えてみませんか。皆さんが大海原の向こうをしっかりと見据えて各自羅針盤をもって船出していただきたいからです。

ところで大人達は青春時代どうだったのでしょうか。(一般論で展開しますが)若者の時代にはがむしゃらに勉強し、社会人になってはがむしゃらに働いたものです。少しでも便利に、少しでも快適にをモットーにして、各分野で先人たちの業績を受け継ぎ発展させました。生活の様相としては、例えば30年前なら、当時手書きがワープロに、個人商店がコンビニに取って代われ、また文化としては長髪にミニスカートに、ロックに、などなど若者がそうした文化を定着させました。そして近年は高度な技術社会を作り、今皆さんがその中にいる訳です。

皆さんは、今ある時代のみ知っているわけです。ただ我ら大人は皆さんと違って今の時代とそうでない時代を両方経験しているのです。ですから今の大人は、こうした時代を大変憂いております。多少難しく言えば、近代技術は映像技術とともに仮想現実空間が現実空間を大きく狭めてきております。これに伴って、仮想空間と現実空間との区別が付きにくく、また生活環境において家庭の崩壊や人間関係の崩壊などが一段と危惧されるようになってきています。

では世の中がこのように変わろうとしているとき、我らどうするのか。二通りの考えがあります。一つは、今の状況を無批判に発展させるべきではない。今一度考え直せというものです。今一つは、今の状況に合わせて生活環境文化を変えていけばよい。専門家の間では、前者の意見保持者は後者の二倍であります(数字は建築家のなかでのもの、他の分野はもっと小さくなるはず)。私がびっくりしたのは、両方の考えの存在であり、各専門家がそれぞれを強く支持しているということです。

でも皆さん、こうした議論をしているのは大人たちです。皆さんは入っておりません。次の時代は皆さんの時代。大人が将来を計画していますが皆さんがそれに満足するはずがなく、新に新しいビジョンで作ってほしいです。ただ、われらのときと違って、今は極度に発達した技術社会です。この事情を踏まえて次をどう設定するのか、先ほどあったように、今の時代だけ

らこそメンタルにも新しい倫理観、価値観を作りさらに技術を推し進めるのか、技術の根源や発展方向を検討していくのか、皆さんは避けておれないはずですよ。考えましょう。時には理屈っぽく。

04.10. *****

「学校って何なの？」

いざ面と向かって問われますと教師といえどもなかなか答えにくいものです。実はこうした鋭い根源的な話が、学生とのコミュニケーションでしょっちゅう出てきます。もちろんプロ野球や浜崎あゆみがどうのこうの等の話のなかからですが、さすがプロの卵ともなると話の端々に人生や物の見方などに造詣深くなることもしばしばです。そんな話の中で持ち上がったのが、「学校って何」ということです。もちろん、学校制度うんぬんではなく「なぜ学校に通い、なぜ教師から教わるのか」など、教育というスペースにおいて教師や学生のあるべき姿は何かということです。日頃の授業の中での教こまを紹介しますので、皆さんも考えてみましょう。

本題には入る前にひとつ。実は学生にがんばるようにハッパをかけております。よく引き合いに(建築以外の方でもよくご存知かと)世界的に著名な建築家「安藤忠雄」先生の話します。彼は高卒です。英語もできないのに半年間ヨーロッパに修行に行ったという。小さいときの熱い想いにより彼は独学で建築を勉強し今はときめく建築家。すると学生は「よっしゃー、おれも頑張ろうっと」。頼もしいかぎり。しかし中には「なーんだ、学校へ行かなくてもいいのか」という学生もたまに出てきます。

そこで本題。「独学でもいいのでは、なぜ学校なのか」。これについても安藤はこうも言っております。「学校へ行けなかったから独学の道を選んだ。専門を極めていけば独学しかないが、苦勞するのはもっとも先に進んでパイオニアとなつてから」と。また「一人勉強でさびしかったことは二点。まず第一が、一生懸命本を読んでも本は私に語りかけてくれない。第二には、自分で勉強しているが、勉強している方向がこれでいいのか、変な袋小路に入っていないのか」と。彼の場合は、いろんな人との交流でそうした二点を克服されたのでしょうか。この話は、何も学生だけにしているわけではなく、我ら大人にも今でもいつでも当てはまるものと思っています。

本学での授業中、学生が急に「本に書いてあることを何で教えるのか、自分で本を読むから教師はいらないのでは」といつてきました。「授業では、本に書いてあることを教えているのではなく、本を道具として教師が学生と教育コミュニケーションをしているのです。そこを勘違いしないで」と答えたことがありました。教育コミュニケーションは教師と学生で造るものです。教師だけが勉強して身に付くものではありません。

関連して今ひとつの話。立川志之輔の寄席がオーバードホール(富山駅前にある県最大の文化ホール)でありました。彼はTVでは落語をしないようにしています。理由は「こちらからはTVの前にいる人の顔やしぐさも見えない。もしかしてビール飲みながら聞いていたり、しまいにチャンネルをかえられたり、

冗談じゃない」と。「寄席では息遣いや静かな間合いなども大事な場の雰囲気。音声や映像だけで芸がなると思ったら大間違い」と。彼は客とともに芸を楽しみたいと主張していたのでしょう。

以上のように、学校スペースでの人と人とのドラマ的な関わりをみました。では皆さんは「学校」にどんなドラマを求め造っていきますか。皆さん自身の成長とともに、そうしたものを練り上げていって欲しいです。それが若者の役割だから。

05. 7. **** 「スケッチをはじめませんか」

皆さん、これから夏休みを迎えようとしております。勉学に励むのもよし、旅行に出かけるのもよし、仕事に打ち込むのもよし。とにかく充実した夏休みを過ごしてください。そんな皆さんの夏休みに、私はスケッチすることをおすすめします。

デザイン系の学生なら当然でしょうが、多くの学生にとってみれば、子供の場合ならいざ知らず「今またなぜ」と思われることでしょうか。私は、何も丁寧にうまく描いてといっているわけではありません。この世の中、感動することは多々あるかとは思いますが、その感動を「ほんまもん」にすることをどのくらい真剣に考えていることでしょうか。割合、好球を見逃していることがあるのではないのでしょうか。そうでなくても、今は情報過多の時代であり、感性や人間性が問われ続けております。そうしたときに、感動のひとつの表現として、紙に自分の想いを描くというスケッチををするのです。それは、もしかすると、丸や三角形や何やらの抽象的構成となるかもしれませんし、自己流に描く風景かもしれません。そうした想いがじっくり時間をかけ、手を動かすことによって醸成される感性となるものです。描くことで手を動かし、その手から頭のほうに感動が伝わってくるのです（本来は頭から手へ）。でも目で見れば十分という人がいるかもしれません。目でみればたちどころに頭の中に光景が入り込むことも事実です。そんなときは、ただ漠然としてみるだけのことが多く、メリハリのない光景になり、最終的には見飽きてしまうといったことになることでしょうか。その点、スケッチでは描きながらのことですので、自然とメリハリをつけてみていることになります。また、時間をかけて描くことにより、感動の雰囲気が体にしみ込んでいきます。

私はそんな体験を皆さんにしていだきたいから、スケッチをすすめるのです。スケッチはカメラやビデオにとって代わられるものではありません。この夏休みに一度トライしてみましょう。ものの見方が変わることでしょう。もちろん、自己流でも何でもありです。なお、スケッチの好きな方はどしどしやってください。

05. 10. **** 「我らの立山について」

皆さん、我らの精神的バックボーンは何ととっても「立山」ではないでしょうか。立山を見ながらの日常生活。立山について理解を深めて、今後にむけての糧にしましょう。

1. 自然：富山の特徴はと聞かれたら、「山と自然と水と森林と米」、特に「立山」と即答する。立山は駿河の富士山と加賀

の白山とともに日本の三名山であり、富山ではシンボリック的存在として有形無形に（農耕や宗教など）我らの生活の営みに大きく関わっている。それは何ととっても立山のスケールの大きな山容に根ざす畏敬の念によるものであり、また立山が（富山平野の東側に）大きく聳え立つ屏風による独特の気候（夏の多湿、冬の豪雪）が野や山に実りをもたらしているためともいえる。

2. いわれ：立山は、一つの頂を持つ山というよりも連峰そのものであり、「屏風のようにそびえ立つので立山となった」といわれている。この他、立山の荒々しさ・力強さに着目して「ノコギリのようになっているとして太刀山が立山となる」といった説もある。ともあれ、立山は、平安期には立山連峰（毛勝三山から薬師岳までの連なり）の総称であったが、時代が下るとともに、連邦の中心部にある立山三山（雄山(3003m)、大汝山(3015)、富士の折立(2998)）のみの総称となった。

3. 歴史：平安末期以降の末法思想とあいまって山は宗教的要素を強め、修行の場となっていく。特に立山の場合には、3000m級の高地が霊を招く極楽浄土となり、また室堂平付近（地獄谷）にある数多くの噴気孔は地獄そのものを演出する。極楽のすぐそばに地獄があるのは立山だけであり、山岳宗教の場が一段と神秘性を富ませていた。そしてまた、立山頂上には富士の折立や白山神社の系統のものまであり、さながら日本三名山の三宗教が一同に集められたことになっている。

4. 布教：修験者は、立山信仰の布教に曼荼羅と称した絵巻物をもって全国各地で活動したといわれている。曼荼羅には、「立山の開山の歴史」「立山の極楽と地獄」「布橋の話（立山山麓にある橋。生前悪いことをした人は橋から落ちるとされている）」が描かれている。なお、売薬の薬についてはもともとは修験者が持ち歩いてきたという説もある。

5. 現代：立山は現代文明の荒波に洗われ開発され、1970年の立山黒部アルペンルート開通によりそれまで20万人であった観光客が以後100万人となり（環境問題はぬきさしならないところまできているが）、より一層大衆化されてきた。それでも我ら（富山人）にとっては霊験あらたかな立山の雄姿は依然としてかわらず、富山の精神的なバックボーンとなっている。

06. 7. **** 「良さの感動はまず自分から —個性的で創造的なもの造りのために—」

もの造りに励んでおられるデザイン、建築、コンピュータの皆さん。もの造りを始めるにあたり何を考えますか。「良い」ものをつくるために色々と考えますと答えることでしょうか。ではその良いものとは何でしょう。世の中のニーズをうまく捉えたり、クライアントの要求を引き出し応えたりするにはどうすべきか、をしっかりと考えた結果が「良い」ものといえます。でも皆さんにとっては、真っ先に自分にとってどんなものが（本当に）良いのかを考えることでしょうか。自分が良いと思わなかったら他の方にはすすめられませんですからね。個性的なもの造りの原点はそのようなところにあるといえます。

ここで、先輩方の話を少し紹介しながら、「自分が満足する良さ」というものを垣間見ましょう。まず第一の例として音楽芸

術から。本校出身ではないのですが、「おわら」の胡弓（楽器）を奏でるヤンキーのような人がおりました。その人は「胡弓の良さはやったもんでないと分からないもん」といって奏でていました。その勇姿は「自分が胡弓の良さに気づいて皆さんに感動を与えることに喜びを感じています」とでもいいかげであり、確かに感動そのものでありました。

次の例ですが、卒業制作で譜面台を作った本学学生がいました。何の変哲もないようにみえる譜面台でしたが、彼がその側に立つと、譜面台が踊るように感じられました。本人は楽器演奏のときに譜面台のお世話になっていたからこそ、作品についてひとつひとつの工夫があったのでしょう。それが不思議なことに実感として見る方に伝わってきました。

このように、彼らは、皆さんに感動いただくために自分自身が満足と喜びの境地にあるのです。自己満足ではありません。他者の喜びとともにある「自分満足」なのです。これがあって初めて自分流の良さが出てくるのです。私は、「皆さん、とにかくとことんやりなさい。理屈のコミュニケーションは結構難しいけれども、情熱ならばかならず伝わります。」といて発破をかけています。作品を造って終わりにするのではなく、良さはまず自分から喜びに変えて、そして皆さんの心に響かせましょう。

06. 10 ****

「郷土の良さを見つけ育てましょう」

「皆さん、郷土についてもっと関心を持ちましょう」というのが今回の論旨です。私は出かけ好きで郷土には何となく関心をもっていたところ、つい最近東京からやってきた友人と話をし、改めて郷土の良さをしみじみと感じました。

その友人とは、海外渡航経験も豊富な芸術家で、今も諸外国を渡り歩く行動人です。彼が近代的なものよりも何か渋い土着のものを見聞したいというので、総曲輪(富山一番の繁華街)でも出かけて買い物とグルメを楽しもうという予定を急遽変更して、次に示すような郷土自慢のところが案内しました。それは、高岡瑞龍寺(大規模伽藍)、高岡金屋町(古い街並み)、新湊内川(ベニスのような雰囲気)、新湊曳き山(実際に引かせてもらった)、上市町大岩山日石寺(三重の塔)、上市町眼目山立山寺(トガ並木)など名所旧跡は当然のこと、立山と称名滝のパノラマ展望道などです。このうち高岡の瑞龍寺は全国的に知られていますね。

友人は帰りしな、「郷土のことをよくそんなに知っていますね、あなたが私の所にこられてもどこへも案内できません。著名なところは直ぐに思いつくのですが郷土となると、うーん思い浮かばない」と言いました。このような話になるとは思わなかっただけに、「そうねー、有名な場所も確かにいいのですが、自分の住んでいる所にも渋く光る良いものがあるはずだと思うのです。ただそれを見つけることが難しく、しかも育てることはしていないのではないのでしょうか」と言葉を返しました。

この後、「郷土に関心を持つとはどのようなことか」と議論を続けました。

自然鑑賞・名所旧跡訪問・文化財鑑賞など観光といえば、直

ぐに著名な所へ行きたがりますが、本当にそのような選択でよいのでしょうか。観光地の過密化、逆にまた荒廃の危惧はこの安易さの結果ではないのでしょうか。文化財保全とか自然保護という、とかく、それは特定(観光地)のものだけを対象としがちです。また、対策も対症療法的な感が否めません。ものを守り育てるという観点を見失いがちなのはなぜでしょう。本来守り育てるべき対象は、むしろ私たちの日常や周辺のものではないのでしょうか。日常に目を向けて初めて、ものについての愛着が生まれるのではないのでしょうか。

愛着とは、やはり自分や自分の周りから育むものですし、物事の価値や素晴らしさはその結果見えてくるはずで、その意味で、郷土のよさの発見と育成は欠かせないことと思います。さらに付け加えれば、「人にやさしい、環境にやさしい」という「やさしさ」は「まず自分から、自分のまわりから」を原点にしなければならぬと思います。皆さん、いかがでしょう。

07. 5 ****

「勉学にむかう姿勢について

—学生とのディスカッションより—

皆さんは、新学期に入り教師からはハッパをかけられながら当然自ら勉学に励んでおられることと思います。そんな時期だからこそ(実は毎年)勉学にむかう姿勢について皆さんから多くの質問を受けます。

まず第一は、「A先生は本をどしどし読め、B先生は本をむやみに読むな」というように、先生方によって言っていることが違っている。混乱することはなほだしい」という質問です。そんな時、私は「精読と乱読の違いであり、両方のスタイルは必要」といっております。いろいろな本に出会いを求め、そこからいろいろと吸収していただきたいものです。

続いて第二は、上記と似たような内容で「学校で沢山のことを学べという方がおられれば、学校で教わっているようではだめという方もおられる。どう対応すればいいのでしょうか」という質問です。特にパイオニアワークをなされる方が後者のコメントを若者に発しておられます。今の若者にはなかなか真意が伝わらず誤解することもあるので、「学ぶとは一体何なのか」少し考えることにしましょう。

パイオニアワーク(創作活動)とは何か。これまでの体系に創造的に積み上げていくものといっているいいでしょう。そのためにはまず体系に(言ってみれば)よじのぼらなくてはなりません。これは習うということです。学ぶとは真似ることからはじまり、それが習うこととなり、学ぶことへと変わっていきます。

では、教わらないとは何なのか。これは真似ることをはなれて、自分の考えや個性を出しましょうということに他なりません。でも勘違いしないでいただきたいのは、個性や創造性は、普通の学びに基づいているものです。ならば、「学び始めの際に、なぜややこしいことをコメントする方がおられるのか、混乱する」という学生もおります。実は、読書の場合と同様、バランスです。何のために学ぶのか、創造的活動のために真似ることと個性・創造性を発揮することを、学び始めの段階を含めてどんな時点でもミックスさせていきたいと思います。

第三には、「我らはなぜ教師から教わるのですか。教師も本を読んで勉強しているのなら、自分は手っ取り早く直接本を読むということはどのようなのでしょうか」という質問です。まずは「なるほどね」といいながら、「実はね、教師は、本の内容を伝えているのではなく、本を道具として、教師の人間性を介して皆さんと教育コミュニケーションしているのです。さらにいえば教師の生き様を見せているのです」と。

ここまでくると学生諸君は結構納得しますが、それでも「いままなげそんなことを言うのですか」、すかさず「それは、皆さんが今フレッシュに学んでいるときだからこそ言いたかったからです」と、ディスカッションラリーは続きます。

とにかく、皆さん、春というすがすがしい季節だからこそ、こうした勉学にむかう姿勢の話がスパイスとなるはずです。そんな季節に、専門を修得し、人間性を養い、センスを磨きましよう。皆さんにとっては、乾いた砂に水がしみこむかのように旺盛な探究心や勉学心がますます光り輝くことでしょう。がんばってください。

07.07 *****

「食とコミュニケーション、大いに楽しみましよう」

私があるグルメ番組に素人コメンテーターとして出演したとき、「なぜ人は食してコミュニケーションするのでしょうか」と尋ねられ、「なぜかしらねえ」と相手に同調しながら「コミュニケーションと食」について語ったことがあります。

もともと、問いかげのきっかけは「食とコミュニケーションが今まさに歪な状態にある」というところにありました。確かに、食については食の安全性の問題、飽食の問題、飢餓の問題などというならば食生活の貧困化・不均衡があり、またコミュニケーションについてはシステム的な人間社会に内含するコミュニケーション不足が取りざたされています。「歪な状態」とはまさにそれであるということが出来ます。

では、なぜそのような歪さが今日的に取りざたされているのでしょうか。まずは、食とコミュニケーションの根源から考えてみます。動物学によれば、我ら人類の祖先が集団で狩をするときに声で合図したのがコミュニケーションの始まりであり、また食とコミュニケーションのリンクについては、獲物を分け合い、動物のようにうめき声をあげながら食していたことが起源であるといえます。そうした本能的なものが理性にとりこまれ、人間独自のコミュニケーションとなり、コミュニケーションはまさに生活の文化的な営みの源となったといえるでしょう。

次に、そうした根源が現代文明社会にどう埋没しているのでしょうか。ここで、我らの日常生活に視点を移し、食とコミュニケーションについて身近な事例をいくつか挙げて考えてみることにします。

(1) 家庭における孤食；家庭では(小さな)子供が家族と一緒に食事をとることが少なくなっており、家族構成そのものがゆらぎかけています。また、「暖かな団欒」の暖かさはいつのまにか温度そのものを意味し、「暖かい食事ならならレンジでチンする」と。(あれ、れ、れ。子供のみならず大人の孤食も本当は問題ですよね。)

(2) 人間関係の輪の狭まり；(どの職場でも似た話があると思いますが) 職場全体で忘年会や歓送迎会以外の食とコミュニケーションはなかなか成り立ちにくいといえます。理由は、「昼にあの顔を見て(上司のことのようだ)、夜に何であの顔を見て食するのか、食がまずくなる」というのだそうです。何事にも気の合った者どうしでとのことなのでしょう。老若男女、おおらかな交流はどこへやら。

(3) コミュニケーションの重要性を教育；ある学校のゼミにて会食会が企画されたおり(どこでもありそうな)次の会話がありました。学生が「金がないから欠席します」。(コミュニケーションを大切に)する) 教員は「ばかもん、借金してでも出て来い」と。若者気質の一断面なのでしょう。

(4) 苦労をともにすれば楽しいコミュニケーション；本学では、毎年、卒業生が卒業パーティを企画し、先生方を招待して学生時代最後の瞬間をコミュニケーションにより大いに楽しんでいます。そこでは、卒業制作の苦労話や学生同士切磋琢磨の話などで、夜のふけ行くのを忘れるかのようです。いい話でしょう。

(5) 粗末なものでも美味しい；山のぼり。山頂でお昼になり、インスタントラーメンを食べることもしばしばであります。これがまた格別においしく話はずみずみ。いい話ですよ。

ちょっと書きすぎたかもしれませんが、項目(1)-(3)の例を挙げるまでもなく、日常生活における食とコミュニケーションには確かに危うさを感じられます。しかし、そうしたなかでも例えば項目(4)、(5)のように、我らは結構自然体で楽しんでおります。ただそうした楽しみを味わうことが日常において難しくなっているといえます。日常の社会システムそのものが、何か人間味のある楽しみをもしかすると奪っているのではないのでしょうか。我らは、そうした日常においても自然体で本能を呼び戻し、自然体で味わい楽しむことにしたいものです。コミュニケーションとは、相手とともに(食を介し)五感を総動員した体全体の行為そのもの。大いに味わい楽しみましよう。

08.07 *****

「勉強にも人との出会いが不可欠！！」

皆さんは、専門を通して社会の営みに参画するために専門の勉強に頑張っておられますが、その勉強の過程の中でいくら知識を修得しても知識の社会的活用がなければ無意味であることを痛切に感じていることでしょう。その意味で皆さんは「専門教育を通じての人間教育」の勉強が真の勉強であることを大なり小なり自覚されています。

ではそんな自覚のもとで、勉強をどのように進めていくのでしょうか。ちょっと理屈っぽくなりますが、勉強の社会性ということになれば、人とのかかわりは避けて通れません。そんな中での勉強となれば、人との出会いのもとで勉強がより一層意味を持つことになり、学校はもちろんのこと皆さんの周りの社会がまさにそのスペースとなります。そこでは、人とのつながりが勉強であるということが思い当たるかと思えます。

ここで、人との出会いを私の趣味を例にしてみたいましよう。私は囲碁が好きでよくたしなんでいます(五目並べとおもって気楽に読み進んでください)。(どんなものでもそうでしょうが)

囲碁というものは習いたてのときも面白く、また上達するにつれて面白さが増していくものです。しかし、ただ闇雲に毎日たしなんでいても上達するものではありません。上達の秘訣には3つの条件があります。すなわち、勉強における人との出会いには次の三つがあります。

- (1) 良き師にめぐりあうこと、
- (2) 良きライバルにめぐりあうこと、
- (3) 良き本にめぐりあうこと。

囲碁で良い手筋（よい手）は、自分だけで単に時間をかけて考えていたのでは思い付きません。そんなとき、良き師のもとでよい手筋を見たり聞いたりすることが必要となります。よい手筋を熟知すれば、さらにより手筋を追究していきたくになります。

また良いライバルがいれば、互いに励みになります。そういえば、中学校や高校のとき100メートル競争でみんなと競い合っていたことを思い出してください。一人で黙々と走るのも結構ですが、競い合いは活力になっていきます。

では、良い本とはどんなことでしょうか。客観的な分析として役立つ情報データベースの活用といった即物的な効用はもちろんありますが、それよりも著者の生き様との出会いがあります。本を通して先人たちの人生観や哲学観などをメッセージとしてしっかりと受け取ることになります。

以上の話はなにも囲碁の世界だけに限らず、どんな世界でも同じです。要は、前へ進むというパッション(情熱)をもって、よき出会いをものにして下さいということです。めぐりあいは、求めてはじめて意味のあるものであり、すれちがいではありません。野球でいうと好球必打であり、好球の見逃しではありません。良い出会いをしっかりとものにしていってください。皆さん、この夏にも良い出会いを！！

08. 10 ****

「ものづくりは自由と制約のバランスから！！」

皆さん、入学したての頃は、プレゼンの練習として線や文字をきれいに描くことや色づかいなどをしっかりとやったことでしょうか。その後、少しずつ内容を深めて、練習の域を越えたいわゆる作品の制作へとすすんできておりますね。

実はその作品制作ですが、最初の頃ですと、例えば「こんなニーズに応えるようなもの」とか、建築なら「敷地をここに」とか、いろいろと制約が与えられております。皆さんが種々のニーズに応えられるように、また取り組みやすいようにするためです。勉強が進むに従い、その制約は教師側から与えるのではなく、自分で自ら自然と課すようにもなり、「何をしてもいい」という自由の意味を理解していきます。

皆さんは、(そうですね)夏休みを過ぎる頃からでしょうか、そう考えるようになってきます。結構物分りがいいなあと思っていると、おもしろいことに、逆にもっと自由に制作がしたいと強くいい始めます。自分が自動車が好きだから自動車にまつわる作品をとか、形や色や構成をもっと奇抜にしたいとか、等、自己主張をしてきます。もちろん、そうすることもまた若者にとっては大変重要なことですが、そこで一度に自由にさせるとすぐ悩み苦しみます。なぜかといえば、ものをつくるとき自

由につくるのが一番難しいからです。種々の条件があると、その中で懸命に考えます。

しかしながら、いつも与えられた条件があると、それ以上のことができなくなるのも事実です。ですから、私たちは、皆さんのやる気持ちを理解しつつ制約を少しずつ解除しながら、自由さを盛り込んでいきます。そして最後には、完全に自由に制作をさせています。これが卒業制作です。

そうなる。「最終的には好き勝手に何でも有りってことか」と思いがちですが、もうこの頃になると、入学当初のように考えていた「自由さ」ではなく、その「自由さ」は皮も二皮も剥けており、今まで私たちが用意していた制約を自分なりに解釈してつくっております。

ある著名な建築家もいっていましたが、「自分は自由に設計をしていますが、自分で制約をきめてそれを楽しんでいます」と。こんな話をすかさず学生にして、「自由と制約」はバランスさせるもの、「制約があつてこそ自由が生きてくるもの」、「クリエイトの本質はそんなもの」と話を続けております。そして、最後には、「人生って制約だらけじゃない」、「でもそんな制約をたのしまなくては」と教訓めいた話で締めております。では皆さん、クリエイトを楽しんでください。

09. 7 ****

「もの造りの社会性」とは、授業のひとつこまより

もの造りは、造り手が使い手(利用者)のニーズに応える形で行われておりますが、使い手のニーズなら何でも応えるべしというところではありません。もの造りの対象が建物のように大きくなればなる程、無秩序かつ我勝手なデザインといったことができないことはいまでもありません。街という我らの生活空間そのものが公共の場であるがゆえに、建物には特定の方のニーズだけではなく、公共のニーズといったものがベースでとなっております。ちょっと気取っていえば「もの造りの社会性」といったところでは。

社会性という硬い話というように取られがちですが、案外もの造りのプロでも時として社会性という基本を忘れがちになりますので、若いときこそしっかりと身につけておくべきものです。

学生諸君は、現実の課題制作を通して社会性という基本を少しずつ身につけていっております。建築では、学生は設計を主に勉強しており、設計製図では実際に図面を描くことができるので特にならばっております。

具体的な設計課題としては、最初は住宅に始まり、次第に規模を大きく機能もレベルアップさせて、美術館とか図書館などの公共建築も扱っていきます。住宅はさすがに生活の基本ですので、良い住まいで良い住まい方をしたいということは誰しも異論がないところですが、対象がプライベートな次元から公共的な次元へと飛躍していきますと、彼らなりに社会性というものを理解し成長しないと、取り組むことができません。

例えば、課題で美術館の設計の時こんなことがありました。建築に來ている学生は、必ずしも美術の愛好家ということでは

なく、絵やスケッチが必ずしも得意という訳でもありません。このためという訳でもありませんが、美術館へ出向こうなどということはあまりなく、ましてやデートコースに入れようなどとは考えもしない、といったようなことを学生が言います。(そこには、課題でやれといわれたから、美術館を考えるかあ、といったニアンスでした。)

そんなとき、さりげなく著名な美術館の例を出します。私は「でもね、金沢の21世紀美術館は『美術を身近に』というキャッチコピーで、建築の設計には各種工夫を凝らして来場者を楽しませてくれますね。」すると学生諸君は「それはそうだけれども、やっぱりいやだ。」「皆さん、自分が美術館に良い印象をもたないなら、逆転の発想ですごく良いものを設計してみたら、きっとデートコースに入れる人が増えるのでは。」「うーん。」

学生諸君は今ひとつ釈然とはしないながら、自分自身の好みの次元を超えて歩みだしている自分に気づきながらも、建築の社会性を少しずつ自分のものにしていくようにして勉強していくのか。かくいう我ら大人も気づかされる次第でした。

最後に皆さんに一言。ここでは建築の社会性をいいましたが、建築に限らずもの造りには社会性がつきものです。皆さん、各自の専門分野で社会性を考えてみてください。社会性が身につくことにより、己が大きくなります。実感してみてください。

09. 11 ****

「文化および文化財をもっと身近にするには」

食欲の秋、スポーツの秋、勉学の秋、文化の秋、秋はまっ盛りです。秋のしんがりをつとめるのが文化といったところでしょうか。我ら、文化とはどのように向き合っているのでしょうか、秋だからこそ考えてみましょう。

文化とは何ですかと問われると、なかなか答えにくいものです。しかし、ラーメンの好きな人(特にこだわる方)に「なぜラーメン(にこだわるのですか)」と問いますと、「ラーメンは文化だからです」と答えが返ってきます。このように、我らの生活のこだわりそのものが文化であり精神活動そのものであるといったことなのでしょう。しゃちこぼった文化の定義はさておき、実感はそうなのです。

では、「文化財とは何ですか」と問いますと、先ほどのように威勢のよい答えは返ってきません。「あー、古いものですね。観光地にあるもの」、しまいには「関係ないや」といった調子となることもままあります。とはいっても、例えば神社仏閣の造形物をみて純粋に「すごいなー」といった感動は我らにはあるはずですので、問題は「なぜ文化財が我らに縁遠いのか」にあります。

ではどうすればいいのでしょうか。我らの身近において、さしずめ文化財を介した生活というものをもっと考えていくべきです。文化財は一級品でなくても名も無きものがたくさんあります。我らはそれに気づいていないだけです。そんな文化財を意識しながらの生活は、文化の育成や擁護につながります。事実、ヨーロッパでも現存する古い建物の街での生活そのものが文化の堪能と理解へとつながっているといます。

以上のように考えれば、結局のところ、我らが積極的にゆとりを追求し物を大事にするといったことに尽きるかと思えます。「なーんだ、それでいいのかわ」といわれがちですが、それで十分なのです。これが、生活のゆとりを実感し、文化を理解し、堪能することになります。我ら、そうしたことを心がけて日常生活を営んでいきたいものです。

10. 07 ****

「皆さん、今だからこそもっとスポーツを！！」

学生の皆さん、もっとスポーツを楽しみましょう。でもそのまえに、皆さん「なぜスポーツですか」と聞かれたら何と答えますか。「スポーツ観戦ならまだいいけど、スポーツするのはダヤイし面倒」とか、「体力作りや健康づくりに当然」とか「楽しいから、面白いから」といった思いなどが様々にあるかと思えます。続いて、私は「なぜ面白い」かを問いたくなります。「やれば面白いのです」といわれそうですが、その面白さは何に起因するのでしょうか。スポーツの特質に触れてみたくなりました。

まずスポーツとは、少し気取って、ルールの上で相手との体を動かし競い合うことによるコミュニケーションといったところでしょう。となりますと、特質は、コミュニケーションという社会性にあるかと思えます。例えば子供遊びでもルールが少しずつ入ってきて子供が楽しみながら社会性を身につけるといいます。こうしたことが積み重なって大人になり、家族や地域のコミュニティが育まれていくものだといえます。社会性あつての楽しみ、あるいはその逆があるのです。スポーツは人間づくりといわれる由縁でもあります。

ちょっと理屈ばかりすぎましたので、ソフトな事例として私が年に数回市民マラソン大会に参加したときの様相について紹介します。

一つには、中学生が「何でうい目にあつて走っているのか」といいながらも一生懸命走っておりました。中学生くらいまでなら、「なぜ(走るのか)」を思いつつも頑張るものですが、大人になると「なぜ」に納得する答えがないと頑張らないものです。これが、皆様の一部の方が持つダヤイの正体です。皆さん、「なぜ」についてかっこいい答えを見出しましょう。

二つには、沿道の方々が惜しめない声援を送っておられました。市民ランナーはもちろんただの(無名)ランナーです。住民の方々は沿道にたち、頑張っている人には自然と声援を送りたくなるのでしょう。また市民ランナーの方も声援に後押しされて頑張っていました。このような様相は本当にホットな地域社会のありようを映し出しています。

皆さん、頑張ることはすばらしいこと、スポーツで頑張ってみましょう。

10. * ****

「技術は人間にかまひすぎ！！」

子供教育関係の方々との懇談会とき、ある方が「教育といわず社会は子供にかまひすぎでは」といわれたとき、私はふと次のようなことを思いました。かまひすぎは子供だけに対してで

しょうか、いや大人にも、いや人間社会そのものにもかまみすぎの傾向があり、我らはしらすらすのうちに容認しているのではないかと。

特に指摘したいのは、技術です。というよりも技術を進める側の方々に対してです。最近、エコナビやスマートグリッドの技術について、確かに技術革新はすごいですね。また惑星探査機の「はやぶさ」の地球生還についても、むしろ技術にはロマンさえいただきます。しかしながら、エコナビのように、例えば「夜がきました、カーテンをしめてください」などのナビアナウンスは必要なのでしょう。ひと頃、エレベーターに音声アナウンスが導入されたときの議論では、眼の不自由な方には必要ということでしたが、一方では人間の意思決定能力の減退が懸念され始めたことを思い出しました。でも技術者は、(そんなことにひるむことなく) こんな機能があればあんな機能があればと、どしどしアイデアを実現させ頑張っています。彼らがまじめであればあるほど、「何のための技術か」見えにくくなっているので、彼らに「こっちの方向は」など誰か言って欲しいと思っています。

我らは、技術革新の恩恵を受けて自然とは距離をおきながら生活するようになってきています。家族関係、社会構成などが、自然を介さずして成立しているかのようであり、仮に成立しないなら技術でカバーということが先行しているかのようによみえます。本当にそれで良いのでしょうか。いやちがう。我らはもっと自然のなかで生活を営んでいくべきでしょう。今のように技術が高度に進化すればするほど、(エコや地球環境保全は当然ですが)「なぜ自然なのか」をもっと考えたいものです。これが、今日社会における人間性のより充実につながっていくものです。特に気張ることなく、自然と付き合っていくこと。すなわち自然と触れ合い、人と人のコミュニケーションを楽しみ、といったことが人間性を育んでいくものと思っています。技術を運用する世の中だからこそ、大いに警告を発したい今日この頃です。

< 3 > おわりに

以上が学生諸君へのメッセージでした。学生諸君にとって、将来に向けて前進するための一助になればと思っています。また、お読みいただいた皆さん、いかがでしたでしょうか。皆さんにとっても、何かのお役に立てばと思っています。

最後までお読みいただきましてありがとうございました。